子どもの知的好奇心をくすぐるためのＩＣＴ活用～ＥＳＤの視点に立って～

越前市武生西小学校

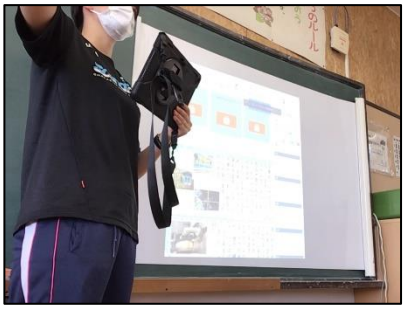
１　はじめに

ＧＩＧＡスクール構想により、昨年度１人１台のタブレットが配付された。そこで昨年度は、「深い学びにつながるＩＣＴを活用した新しい授業スタイルの構築」をテーマに掲げ、定期的に現職教育を行いながら、授業実践を通して様々な有効的な活用方法を探ってきた。全職員で試行錯誤しながらタブレットを活用する授業にチャレンジし、これまでにはなかった意見共有の方法や遠隔地との交流など、新しい授業スタイルが少しずつ見えてきた。

今年度は、昨年度までの取り組みを継続しながら、さらに子どもたちの知的好奇心をくすぐり、子どもたちが主体的に学習に向かっていく姿に結び付けられるような取り組みを行ってきた。また、スクールプランにある「ＥＳＤ」の視点を大切にし、ＩＣＴの活用が、「多面的・総合的に考える力」「他者と協力する力やつながりを尊重する態度」「コミュニケーションを行う力」「批判的に考える力」の育成に繋がっているかを検討しながら、より効果的な活用の方法を探るべく、実践を積み重ねてきた。

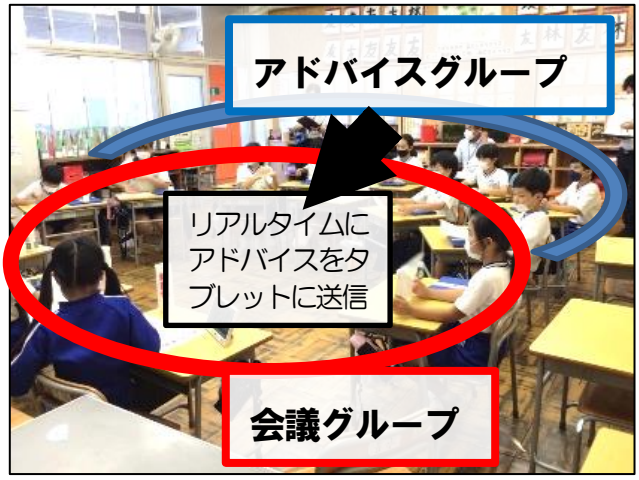
２　具体的な取組

（１）現職教育



タブレットが導入された昨年度は、教師も子どもたちもまずは基本的な使い方を身に付けることが先決だった。今年度は、より効果的にタブレットを授業で生かす方法を探り、共有していこうと考えた。そこで、まず本校職員がタブレットの活用に関してどのようなことを知りたいのかアンケートを取った。その中で希望が多かった「授業ですぐに使えるメタモジの機能」に関する現職教育を７月２８日（木）に行った。情報主任や若手教員が自身の実践を例にしながらメンターとなり、全職員で実際に作成しながら、子どもたちが図形や付箋などを動かして考えるワークシート作りやアンケート機能の使い方などについて学ぶことができた。その他、グーグルアースなど、学習支援アプリ以外のアプリを授業で活用する方法を紹介するなどしながら、２学期からの活用に向けて意識向上を図ることができた。また、授業者それぞれが作成したワークシートを共有フォルダに格納し、いつでも誰でも閲覧・使用できるようにしたことで、操作に苦手意識を感じている教員も、気軽にワークシートを作成して授業で活用できるようになった。後述するが、９月に行われた後期の指導主事訪問の際は、これまでになかった新しい活用方法で授業を行う姿が見られた。全体研究会では、今年度もタブレットを活用して自由に意見を書き込むことで、活発な意見交換を行うことが出来た。

（２）授業実践①【グループ学習ページを使った新たな活用法】



役割を意識した話し合い活動について、どうすればより良い話し合い活動を行うことができるのかを考える授業である。これまでも、実際に話し合いをする会議グループと、その様子を周りで見ているアドバイスグループに分かれ、話し合いの後に気づいたことを発表する活動は行われていた。本時では、メタモジの「グループ学習機能」を使い、会議グループとアドバイスグループであらかじめグループ設定をしておいた。そうすることで、会議グループは、会議中にグループ学習ページにアドバイスグループが書き込んだ内容をリアルタ

イムに見ることが出来る。タブレットがなければ、話し合いの後アドバイスをする時間を確保する必要があるが、タブレットを活用することで、与えられた役割としてどのように話し合いに参加すると良いのかという学習のねらいについて十分にふり返りを行う時間を確保することができた。ＥＳＤにおける、持続可能な社会づくりのための課題解決に必要な７つの能力・態度のうち、「コミュニケーションを行う力」「他者と協力する力」「つながりを尊重する態度」「進んで参加する態度」の育成につながる活用方法として他の学習活動でも応用していきたい。使える機能をどうすれば学習のねらいを達成するために有効的に使うことが出来るのかを考えていく上で、今後の指針となる授業実践となった。

会議後のふりかえり

（３）授業実践②　【遠隔地との交流や家庭学習との連携】

今年度も、タブレットの大きなメリットである、「離れた場所にいる相手と交流ができる」を生かして、授業に活用した。４年生は、長野県の若槻小学校と年間を通じて互いの地域や学校行事を紹介し合うなどして交流を続けた。自分たちが住むまちを調べて発表する活動は、タブレット導入前からも行われてきたが、これまで実現は難しかった、遠く離れた県外に住む同じ小学生に対して発表をするという目標設定によって、自分たちが住む町を知ってもらいたいとの思いが強くなり、子どもたちの学習意欲の向上につながった。

若槻小との交流

家庭で撮影してきた写真を使って話し合い

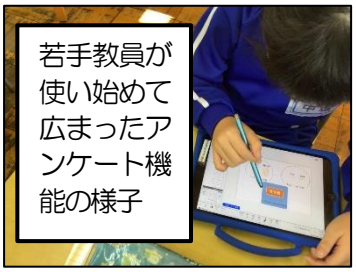
また、今年度も学校行事や集会活動におけるリモート中継や、欠席児童のためのリモート授業など、遠隔地との交流が出来るタブレットのメリットを生かした学習活動を、授業以外でも実践していくことができた。縦割り活動においても、児童会がタブレットにクイズを送り、班ごとに答えるという活動を行うことができた。

縦割り活動の様子

さらに、今年度は、タブレットを家庭に毎日持ち帰るようになった。そこで、タブレットを使って写真に撮ってきたものを基に授業で話し合いをするなど、家庭で調べてきたことを授業に生かす取り組みが見られるようになった。毎単元、毎時間は難しいが、ドリル学習に見られるような復習的な家庭学習だけでなく、家庭で取り組んだことが授業に生かされるような予習的な家庭学習に、今後も継続して取り組んでいきたい。

３　成果と課題

授業におけるタブレットの利用率は昨年度に比べると上がってきており、子どもたちも教員も使うことが当たり前になった。若手教員が新たな機能を発見すると、それを使ってみようと他の教員が意欲的に取り入れる姿も見られた。また、それぞれの教員が作成したワークシートを、職員全員が見られるように共有フォルダに格納していくことで、白紙の状態から作成する手間も省けるとともに、新たなアイディアを生むヒントにもなった。


若手教員が使い始めて広まったアンケート機能の様子

一方で、授業中に子どもたちがタブレットから目を離せず、活動の切り替えがなかなか出来ない姿も多く見られた。家庭での使用の様子に問題を感じているという保護者アンケートの声も多数あった。今後は、情報モラル教育など、各学年に応じた取り組みを年間指導計画に盛り込み、系統的な指導が出来るようにしていきたい。

タブレットを効果的に使うには、ベースとなる授業力の向上が欠かせない。子どもたちにつけたい力は何か、そのためにどのような活動を取り入れると良いのか、その授業での学びがＥＳＤのどんな能力の育成につながっているのかということを考え、より良い効果的な活用方法についてこれからも全職員で意見を出し合いながら研究を積み重ねていきたい。